

同朋
選書
37

地上に立つ宗教

藤元正樹

目次 ● 地上に立つ宗教

第一章 国土

救いを表す概念／法蔵菩薩の事業／「すてる」と「やめる」／
国土を莊嚴する行／国土を離れた念仏／生死の海を渡る／現生
不退の意味／根源的連帯の世界

第二章 根源的連帯—不回向の行—

現前する自分／影表裏に暢る／『選択集』と国家論／菩提心の
行／往生の因となる／根源的連帯の自覚／門徒中の一列

「国土」が問われる歴史的状况／地上に立つ宗教／「しるし」としての「証」／国土建立の因を了知する／すべてに到来する／人間の生きる条件／梵声悟らしむること深遠なり／救われざる者としての連帯

浄土の光／如来の心／仏法を求め心／生活に浄土はどう聞くのか／人と人との出遇いの中に

特にこの経を留めて／行証ということ／衆生の疑惑が教えを滅ぼす／疑惑を内面として生きてくる信／像法の問題／真宗の教えの明証

浄土の教え／如来の問いかけの中で／どう世界を求めるのか／草提希の求めた世界／仏の心になう／関係を断つていくさとり／実業の凡夫／自分になう世界／浄土は浄土を求める心にある

第一章

国土

1

救いを表す概念

「共学」ということにつきまして、「共に学ぶ」ということは、たんに教えを学ぶということではないのでありまして、学ぶことの意味が問われている言葉であろうと思うのであります。つまり、たんに教えを学ぶということだけですと、具体的に生きている私たちにとって教えというものが、救いにならないのであります。教学というものは、人を救うものでありまして、人を救えない教学というのは、竜宮に入った教学でございましょう。竜宮に入った宝でしかない。その竜宮に入った教学を、竜宮から引きずり出すという意味が、共学、共に学ぶという言葉の中にはあると思うのであります。

今回、共学研修会のテーマとして、「国土」ということが掲げられたのであります。この「国土」という言葉で言い当てようとしているのは、とくに『大無量寿経』では、「救い」ということであります。つまり、真宗の教学が、私たちの具体的な生活の中で、私の救いとなるかと、そういう「救い」を表す概念が「国土」であります。人間は「国土」を求めている。「国土」を見出すことを求めている。「国土」こそ、救いを表す概念であるということにございませう。そこで、今日「国土」というものが、私たちにどういう形で与えられているのかということですが、「国土」という言葉は、「国」と「土」という二つの概念をもっています。「国」と申しますと、国家、こくに「土」は、大地ちと
いうことで、救いを表す概念として用いられているのであります。

また『観無量寿経』では、「国」とは「家」の概念で、「如来の家に生まれる」、「如来の眷属けんぞくとなる」という言葉で表されます。それは内容的には、「仏子」、「仏の子になる」ということでありませう。こういうことで「救い」を表すわけにございませうが、ここに「国」と「家」ということで「国家」ということがあるわけにございませう。

それから「土」ということですが、これは申すまでもなく「大地」ということで、

一つの感動を表す言葉でございます。土を踏みしめる」と申しまして、例えばいつも感じることでありますが、高校野球で甲子園の土を持って帰ります。そこに、自分が踏みしめた土と申しますのは、感動を踏みしめたものでありましょう。その感動のひとつときを持って帰るのでありましょう。

いのちの感動を踏みしめた、それを象徴しているのが「土」という言葉であります。更に申しますと「土」というのは、いのちの感動を表す言葉です。そして、そういう世界を表す言葉が、「園」ということなのであります。ですから、こういう「国土」という言葉で言い当てようとしている問題が、今日の私たちに問われているということでございます。

法蔵菩薩の事業

ご承知のように、法蔵菩薩ほうぞうぼさつという神話がございます。法蔵菩薩は「棄国捐王」きこくけんおう（真宗聖典二〇頁）というところで、国を棄て王を捐てた方でございますが、国を棄て王を捐てることにおいて果たそうとした事業とは何か、国において、国を棄てずに王位を捐てずに何かをやるうとしたのではないのです。国を棄て王を捐てることによつて果たそうとした事業、そういうことが一つあるわけです。

法蔵菩薩は本願を建立したのですが、なぜ本願を建立したのか。願いを建てたというが、願いを建てるのにわざわざ国を棄てなければならんのかという問題があるわけですか。

そういうことで、法蔵菩薩は国を棄て王を捐てたということではありますが、そのこ

とは自己の立場をすてたという意味があるのでしょうか。ですから、共学研修会と申しますのは寺をもって本山へ行くのではない。寺をすてて来たということがあるはずで、それは自分の立場をすてて来たということです。法蔵菩薩は国を棄て王を捐てることによって真の国を願ったということが表されているのであります。「時に国王ましましき。仏の説法を聞きて心に悦予を懐き」(同前)とありますが、仏の説法を聞いて心に悦びを懐いて、国を棄て王を捐てて、法蔵は真の国を建設せんとするのであります。われわれには、よろこんですてることがない。惜しがるんです。

ところが法蔵は、よろこんですてることによって真の国を建設せんとする。すてっぱなしということではありません。すてっぱなしということは、それはやめたただけの話なんですよ。私たちが寺をすてて共学研修会に来たということは、寺をやめるということではありません。法蔵菩薩が心によるこびを懐いて国を棄てたというのは、国を考えることをやめたんではない。いやいやながらすてるということが、むしろやめるということなんです。いやいやながらすてたということじゃなくて、よろこんです

てた。だから、そこから国を考えることを始めることができますのでございます。

ですから、法蔵菩薩が国を棄てるといふことの自覚内容は、「無上正真道意」(同前)をおこしたとあります。「無上」といいますのは、「この上ない」ということでもありますし、「正真」ということは、「正しい信心」ということであります。その正しい信心の道を求める意をおこしたが故に、国を棄て王を捐てたということなんであります。無上正真の道意が国を棄てしめたということが言えるのであります。

「すてる」と「やめる」

「無上正真道意」とありますように、真実を求める意というものが、自分の立場をすてさせた。それはただなくした、やめたというのではなくて、むしろそこからほんとうの意味の国を求めた。国王が国を棄てたということは、ただ国王をやめたという

ことだけでなく、ほんとうの国を求めたということがあるのです。国土としての法蔵が、いろんな形で国というものを完成していく。国の本質とは何かと問うていく。そしておそらく、そこにあるのは国といつても国民くにとみということでありましょう。人間をして真に人間たらしめるものは何か。今日の国家の国家たるゆえんは、わずかに福祉政策というようなものでありますが、福祉政策というようなことだけがほんとうに国であるという意味を満たしているのだろうか。そういうことが一つあると思います。

いずれにしても、そこに法蔵が求めたものは、国民をして国民たらしめるものは一体何なのか、そういう問いが「無上正真の道意」という言葉で表されているのです。ほんとうの国を作るために、正真の道意を求める。その意が法蔵をして国を棄てさせる。人間を求めるためには、人間をすてにやならんということがあります。われわれが人間であると面おもてをかまえておつて、人間であるわけにいかんのです。人間であるためには、人間であるということ自体をすてねばならん。そこに法蔵が、国を棄てることによつて、「行じて沙門しゃもんと作り、号して法蔵ほうぞうと曰いいき」と、こう言つてあります。

そうしますと、まずそこに出てまいりますのが、嘆仏ということであります。仏をたえろということは、自らに真実の道を求める意をおこさしめた仏を讃嘆するわけがあります。自らのすべてをすてさしめたものに対する讃嘆であります。何かを得させたものに対する讃嘆ではない。自分をよろこんですてさせたものに対する讃嘆であります。

仏のことを大捨だいしやと申しますが、人間はそういうすてることのよろこびを求めている。自分をほんとうにすてさせるものに対するよろこび、自分が何かをすててよろこぶというのではない、自分をよろこんですてせしめるものを求めている。そして、そのよろこんですてせしめるものというのが法であります。